

## ゲーテの救済観

友 田 孝 興

ゲーテの救済観を考えるにあたって、まず思い起こされるのが、彼がエッカーマンに対して語った一八三一年六月六日の言葉である。

Gerettet ist das edle Glied  
Der Geisterwelt vom Bösen :  
Wer immer strebend sich bemüht,  
Den können wir erlösen,  
Und hat an ihm die Liebe gar  
Von oben teilgenommen,  
Begegnet ihm die selige Schar  
Mit herzlichem Willkommen. (11934-41)

「霊の世界の高貴な一員が／悪から救われました。／常に努力して励む者を／我らは救済することができます。／それにこの人には天上からの／愛さえもが加わり、／祝福された人々の群が／歓んでこの人を出迎えるのです」。彼は「ファウスト・第二部」の最終場面「山峡」(Bergschluchten)で歌われるこの天使たちの合唱を引用しながら、「この詩行の中にファウスト救済への鍵が含まれている。ファウスト自身の中には最後に至るまで、ますます高まり純粹になってゆく活動性があり、そして天上からは彼を助けにくる永遠の愛がある。このことは我々の宗教上の観念と全く一致している。つまりその観念によれば、我々は単に自己の

力だけによってではなく、それにつけ加わる神の恩寵によって淨福に至るのである」と表明する。つまり彼はここで、「努力」(Streben)の本質としての「ますます高まり純粹になってゆく活動性」(eine immer höhere und reinere Tätigkeit)と天上からの「永遠の愛」(die ewige Liebe)との結合を救済の正因とし、またそれゆえに、自己の救済観とキリスト教のそれとが一致することを表白するのであるが、しかしゲーテのこの結論は、もう少し作品に即して検証される必要があるように思われる。というのは、「ファウスト」においては、最初と最後が、つまり「天上の序曲」(Prolog im Himmel)とこの「山峡」とが、対極をなす天上空間であり、ファウストの活動の場としての地上空間を前後から挟む形で、地上の俗性に天上の聖性を与える役割を担っているしたがってこの両場面における形象・観念には、キリスト教の形式を借りた仮装がほどこされているからである。

さてこのことを念頭に置きながら、救済の正因とされる「努力」と「愛」の問題について考察を進めてみよう。「最高の存在を目指して絶えず努力すること」(zum höchsten Dasein immerfort zu streben: 4686)はゲーテの生の本質であった。それゆえに彼は、理念の世界としての天上空間・「天上の序曲」において、まっ先に主(神)の口を借りて、この「努力」の問題を提起するのである。

Es irrt der Mensch, solang er strebt. (317)

この「人間は努力する限り、迷うものだ」という言葉は、否定を本領とする悪魔・メフィストフェレスに向かって、主がファウストを弁護する形で語る言葉である。そして、ファウストは今のところ混乱した思いで神に仕えているが、やがて明境へと導き入れ

られる存在であることが暗示され、メフィストフェレスがファウストを誘惑して、どれほど悪の道へつれこもうとしても、彼の魂をいのちの根源からひきはなすことは不可能であり、

Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange

Ist sich des rechten Weges wohl bewußt. (328-9)

「善い人間は、よしんば暗い衝動に動かされても／正しい道を忘れはしないものだ」と、最後には恥ずかしい思いでこう白状せざるを得なくなるであろう、という主の自信が表明される。つまりゲーテにとっては、救済の本来の正因でなければならぬはずの、神（真なるもの）への愛の衝動としての信心が、決定しているように、未決定の状態（暗い衝動）にあるのが、それはここでは問題ではない。キリスト教においては、「最高の存在を目指して絶えず努力すること」の内実は、神への愛の衝動としての信が衝き動かす、至高善への純粹なる活動性（行）にある。それゆえに人間はこの神への信仰によって罪を赦され、信・行一体の行によって救済の恩寵にあずかることができるのである。しかしゲーテにとっては、このような決定した信から生まれる行としての「努力」が問題なのではなく、まず

Im Anfang war die Tat! (1237)

「初めに行ありき！」なのである。樹木が自然の本能に従って天へと成長するように、自然の衝動の発動としての行（努力）は、諸々の障害にぶちあたる中で、おのずと「最高の存在を目指して」「ますます高まり純粹になってゆく」。信が行（努力）を生むのではなく、ゲーテにあつては、行（努力）が信を自然に開顯するのであり、置かれた境遇の中で自己の生を最大限に燃焼させる行者には、神への愛に対しての恩寵としてではなく、むしろ逆に、

神からの愛としての恩寵が行（努力）そのものに対して天上から与えられてしかるべきである、という自己の行（努力）に対する矜持と信念がいきづいていく。またキリスト教においては、信に目覚めた者が「善い人間」であり、キリスト教的仮装をほどこしている以上、主（神）の口から語られる言葉としては、救済の対象者が「善い人間」でなければならぬのは当然であろう。しかしゲーテにとっては、ファウストを「善い人間」と考える必然性はどこにもない。むしろ地上空間における行状からすれば、彼は悪人そのものである。しかしながら、「原罪」に対して、「仏性」ともいふべき「原徳」をすべての人間に認めるのがゲーテである。したがって、この意味においてであれば、天上空間に限定して、ファウストを「善い人間」として規定することは当然可能である。

以上の考察からも明らかのように、天上空間における重要な言葉はみな二重の意味をもっているということである。神の口を通して、実はゲーテ独自の救済観が語られている。つまり彼にとっては、救済の正因としての「努力」はいのちの本能的な働きそのもの、換言すれば *Streben* = *Uebung* なのである。したがって「努力する限り迷う」ということは、生きる限り、現世に生を営む限り、人間は愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑することから離れることはできない、ということに他ならない。しかし生の本質としての行（努力）によって不可避免的に諸き起こされる「迷い」とその行状が、救済の決定的な否定要因を意味するものではないということである。むしろ迷境に浮沈する生への意志に燃えた人間（ファウスト）をこそ、神は「永遠の愛」によって明境へと救い摂らなければならない。なぜなら、人間はみな「最高の存在を目指して努力する」質としての「原徳」（善性）をもつ

た「善い人間」だからである。かくして、このような人間の善性に対するゲーテの信頼感の帰結として、最初の引用にあるように、天使たちは神に代って、「常に努力して励む者を／我らは救済することができます」と歌うのである。要するに、キリスト者にしてもゲーテにしても、本質的な意味は異なるが、「努力」が救済の正因であることにはかわりはない。

さて今度は、目を天上空間から、ファウストの活動の場である地上空間へ向けてみよう。

Ein Teil von jener Kraft,

Die stets das Böse will und stets das Gute schafft.  
(1336-7)

「常に悪を欲して常に善をなす、／あの力の一部です」と名づけるメフィストフェレスを伴ってのファウストの「努力」が、『第一部』においては、グレートヒエン悲劇をひき起こしてゆくことになる。つまり、ファウストの愛を受け入れたグレートヒエンはある夜、彼から与えられた眠り薬の投与分量をまちがえて母を殺してしまふ。彼女の墮落を知った兄は、ファウストとメフィストを相手に決闘し、逆に刺し殺される。やがて彼女は、ファウストとの間の不義密通から生まれた子供を、苦悩の末に池へ投げ込み、私生児殺しの重罪で、死刑囚として投獄される。彼女の悲惨な運命を知ったファウストは彼女を救い出そうとする。しかし彼女は、

Gericht Gottes! Dir hab' ich mich übergeben! (4605)

「神さまのお裁きを！ 私はこの身を神さまにおまかせいたします！」と言ってそれを断る。ファウストに救いを求めるのではなく、自分の罪を認め、一切を神の審判に委ねるのである。「あの女は裁かれた！」というメフィストの断罪に対し、天上より

「救われた！」という声が響いてくる。つまり彼女は、神へのこのような純なる信仰によって罪を赦され、救済の恩寵を受けることになったのである。また『第二部』の最終幕において、ファウストは、

Auf freiem Grund mit freiem Volke stehen. (11580)

「自由な土地に自由な民と共に生きる」ことを夢みて海辺を干拓し広大な土地を手に入れる。しかしその折り、限界を知らない自我の拡張欲は、神の秩序の中で平和に暮らすフィレモンとパウチスという老夫婦に立ちのきを迫る。支配者にとっての「自由」は、被支配者にとっては「強制」であり、「交換」は「強奪」に他ならない。そしてこの二人は、メフィストとその手下によって、ファウストの思いを離れて殺されてしまふ。

悪魔の力を借りて自己の欲望の限りなき充足に努めるファウスト、彼は『第一部』においてはグレートヒエンを獄死させ、また『第二部』においては、自分の手はくださなくとも、権力と無限の自己拡張欲によって、結果的には老夫婦を死に至らしめる。このようなファウストの「努力」(行・活動)に対して救済の恩寵が与えられるなら、「花園を荒しまわるどんな豚でも庭師と呼ばれるに価する」とまでW・メンツェルは言い切る。しかしこれはキリスト教的善悪観から導き出される結論であって、ファウストにはあてはまらない。彼の「努力」は善悪を超えた宇宙的自然生命の脈動そのものを「生きる」ことを意味した。したがって、それがたとえ神への愛としての信に欠ける行であつても、自然(＝神)を生きたることによって、神からの愛としての恩寵が与えられることになる。

ところで最後に、あの「救われた」グレートヒエンが、自分を

破滅に導いた当のファウストの魂を迎え入れ、愛の象徴である聖母マリアに自ら恩寵をこい願うのであるが、ファウストの「努力」内容の地上的善悪尺度を超えて、このようなすべてを受け入れすべてを赦す女性原理としての愛によって、ファウストの魂は救済されたのである。それゆえに、

Das Ewig = Weibliche

— Zieht uns hinan. (12110-11)

「永遠に女性的なるもの／我らを引きて昇らしむ」という言葉をもって、「永遠の愛」の偉大さが讃えられることになる。地上空間におけるファウストの活動から帰結される魂の破滅の必然性とそれにもかかわらず、自然の生成と破壊の営みをその身において生き切るファウストをこそ助けなければならないとする救済の絶対的要請、ゲーテはこの二律背反を、愛の質を地上的なものから天上的なものへと高め純化することによって止揚し、それによって彼独自の救済観をこの作品において表現することができたと言いうことができるであろう。

(本学教授 ドイツ文学)